

GIGA スクール時代における ICT ミドルリーダーの役割

学籍番号 J219116
氏名 出水 洋一郎
主指導教員 田村 知子
副指導教員 田中 満公子

第1章 問題の所在と目的

1.1. 日本における高等学校教員の勤務実態

教職員の心理面（多忙感）を中心に、教職員の過重勤務の実態についての分析を行った。その中で喫緊の課題として、ICT等による校務支援システムの整備、勤務時間の削減、持ち帰り仕事の削減、負担感が大きい業務の改善等が挙げられてきた。

1.2. 学校関係者から見た高等学校のGIGAスクール構想に関する課題

学校現場におけるICT環境の実態について調査した。課題としてはICTリテラシーが高い教職員に業務負担が偏ること、保護者教職員両方から書類や調査のデジタル化が進んでいないことの指摘が挙げられた。

1.3. 勤務校における課題、研究目的

本実践では、報告者が勤務校でミドルリーダーとして、「校務の効率化と働き方改革の推進」を実現することを第1の目的とする。そして、GIGAスクール時代におけるICTミドルリーダーの在り方を明確化することを第2の研究の目的とする。

第2章 先行研究の検討と研究の目的

2.1. 課題を解決するための先行研究、先行実践の検討

報告者が働き方改革事例集を「実現コスト」と「効果」を基準にまとめ、まず実現コストが低く効果が高い取り組みから始めることを検討した。報告者の性格、勤務校の現状、ICTの特質を考慮した結果、サーバントリーダーシップが実践をするうえで必要とされるリーダーシップ論であると仮説を立て実践に取り組んだ。

2.2. 研究の方法

本研究では実践を2期に分け計画し、2021年度は「校務の効率化と働き方改革の推進」を実現するための準備期間に充て、2022年度はミドルリーダーの立場から、ICTを活用して「校務の効率化と働き方改革の推進」に取り組んだ。成果の検証方法としては「校務の改革と働き方改革の推進」についてのWebアンケートとインタビューを実施した。

第3章 実践

3.1. 実践研究1(2021)

実践研究1の目的は、実習校でGIGAスクール実現の中心的役割として生徒と教職員が利用しやすいICT環境を整備することであった。それを実現するため、Chromebookの活用、採点補助ツールの活用、Google Workspace for Educationを活用した観点別評価を取り組みとして実施した。結果は、学校組織としてChromebookを有効に活用する組織風土の醸成に貢献できたこと、教職員の採点時間削減ができたこと、教職員の負担を抑えながら新たな取り組みを次年度以降実施することができる目途がついたことにあった。2022年度は、ICTミドルリーダーの役割とICT活用が「校務の効率化と働き方改革の推進」有効であるか否か研究を行う。

3.2. 実践研究2(2022)

実践研究2の目的は、GIGAスクール時代のICTミドルリーダーとして「校務の効率化と働き方改革の推進」を重点に、Society5.0時代に対応できる学校組織にしていくことであった。それを実現するため、Chromebookの活用と校務のICT化・スマート化、採点補助ツールの活用と推進、探究科の科目における効果的なICT活用の実践の蓄積、取り組みの継承を行った。結果は、Chromebookを会議の電子化や特別教室の予約等で使用するようになったことで校内での活用が広まったこと、採点補助ツールに関する視察が大阪府立高校から複数あったこと、ICTを活用することで授業を効率化し授業改善に繋がったこと、勉強会の実施や普段からの結びつきで適切な支援を行うことができたことにあった。

第4章 まとめと考察

4.1. 成果の検証

本実践研究では、取り組みの成果として各教職員に認識される成果もまたそれぞれに異なることが予想される。そのため本実践研究の成果の検証は、質的な調査を中心に量的な調査を組み合わせたものにもとづいて行った。

4.2. 成果と課題

研究の成果として、ICTの活用は「校務の効率化と働き方改革の推進」に寄与すること、ICTを校内で進めていくためにはサーバントリーダーシップが有用であることであった。一方で、ICT以外の側面での業務改善、教職員による日頃の実践の継承、組織体制の見直しが働き方改革で必要になってくることが判明した。

4.3. まとめと展望

ICTミドルリーダーの役割は教職員の需要をしっかりと傾聴しながら適切な支援を行うことにあり、教職員集団の助け合いを支える影のリーダーとなることである。今後の展望として報告者はICTミドルリーダーの新たな役割の模索とICTによらない校務の効率化と働き方改革推進に取り組む。